毛沢東によって受容された西洋思想は如何なるものであったか
―『倫理学原理』第七章の検討―

金　井　睦

Abstract

This paper analyzes the ethical theories which was read by the young Mao Zedong. This study focuses on *System der Ethik* which was written by Friedrich Paulsen and is about western philosophy.

Mao noted in the margins various annotations as his own opinion. To analyze those annotations is useful for knowing what the young Mao thought. The purpose of this paper is to figure out what he read about modern western philosophy from Paulsen. This paper attempts to take up chapter 7 of *System der Ethik*, which is referred to as "virtue and happiness", and analyzes how he took new worth as a moralistic theme.

This study shows that Mao has agreed to most of the new philosophic ideas from Paulsen. He could perhaps take some cues from *System der Ethik* to reconsider his own opinions about domestic issues in China.

キーワード……毛沢東　『倫理学原理』道徳と幸福　善と悪　天と神

1　はじめに

フリードリッヒ・パウルゼン(Friedrich Paulsen 1846-1908)の *System der Ethik* は、日本人の蟹江義丸によって日本語に翻訳された後、蔡元培によって漢語訳された。漢語では『倫理学原理』[1)]という題で出版され、青年時代の毛沢東によって読まれることとなった。これは 1917 年から 1918 年にかけて湖南省第一師範学校において、楊昌済によって講義されたもので、当時学生であった毛沢東は『倫理学原理』の漢語訳が書かれている余白部分に、彼なりの批語を書き加えた。

毛沢東が『倫理学原理』を読むこととなった 1917 年までに、中国国内では、革命や反乱などが多発していた。これは、西洋文明の中国本土への流入により、中国伝統思想と西洋的な新しい価値観が対立していたことも要因である。当時、義和団の乱、清朝の滅亡、辛亥革命、袁世凱の大総統就任、日本による 21 か条の要求の受諾、第三革命などの革命の嵐が巻き起こっていた。つまり、『倫理学原理』が講義されたのは、中国国内が混沌とし、国家の行く末を予想できない時代であった。中国がこのような状況であるにもかかわらず、楊昌済並びに毛沢東が、西洋より伝来した『倫理学原理』を読み解こうとしたことは、当時の社会における問題に対して、意識を高く持っていたということであろう。

本稿では、毛沢東が「此章説得最好（これは最も良い章である）」と、章の冒頭部分で評価した「道徳及び幸福」について論じられた第七章を取り上げる。本章において、毛沢東はほとんど批判的なことを記してはいない。すなわち、本章を取り上げることは、毛沢東が如何なる価値観を重視していたのかを、より顕著化させることになるであろう。本章には、善と悪や幸福についての議論のほかに、中国で大暴動を巻き起こす契機となったキリスト教的な価値観も含まれている。当時の社会背景を考慮すれば、楊昌済と毛沢東は、たいへん柔軟な姿勢で西洋思想に取り組もうとしていたといえる。

ただし、当時の湖南第一師範学校の校長であった孔昭綬は、南京政府の教育総長であった蔡元培による新しい教育方針である「教育宗旨令」の理念を積極的に取り入れようとしていたという背景も考慮しなければならないだろう[2)]。すなわち、蔡元培と孔昭綬に関係によっては、蔡元培が翻訳した『倫理学原理』が楊昌済によって講義され、毛沢東が読み進めるまでには、何らかの政治的影響があった可能性もある。その点を考慮すれば、『倫理学原理』における批注にも、少なくとも湖南第一師範学校が支持しようとしていた理念、すなわち政治的な方向性並びに教育的方針が表れているのではないかと推察できる。

このような点も意識し、本稿では毛沢東が生きてきた社会的背景も取り上げながら、彼の批語を分析してゆきたい。

しかし、楊昌済の講義を聴きながら、『倫理学原理』において、漢語に翻訳された西洋的価値観を読み解いてゆくことは、若き毛沢東に、自分が生きている中国社会の現状と問題点を見直させる契機となったはずだ。この批語には、本格的な政治運動に参加する前の、毛沢東の西洋に対する新鮮な視点も表れているはずである。批語は楊昌済による学術的指導によって導かれて記されたものではあるが、彼が『倫理学原理』という一つの西洋思想と向き合ったという経験は、彼の思想形成に大きな影響を与えたといえるだろう。楊昌済はこの講義の数年後の 1920 年 1 月には死去しているが、その時の毛沢東の妻が、楊昌済の娘の楊開慧であることを考慮すれば、楊昌済が毛沢東との個人的な関係においても如何に大きな影響力をもっていたかということは想像に難くない。

このような毛沢東の個人的な背景や、彼が目撃してきた、近代中国史を形成してきた様々な革命なども考慮しながら、彼の考えを考察してゆきたい。

2　「第七章　道徳及び幸福」における批注

『倫理学原理』第七章は、徳と幸福の関係について考察された章である[3)]。この章は、「１、幸福の上に成り立つ徳の影響」[4)]、「２、人格の上に成り立つ幸福の影響」[5)]について考察する目的で執筆されたものである。

以下で取り上げる箇所より、毛沢東の批語が記されている。本稿では、蟹江義丸による日本語訳、蔡元培による漢語訳、毛沢東の批語の順で記し、著者による毛沢東の日本語訳は注釈に

記す。なお、本稿で日本語訳を取り上げる際、注釈にドイツ語原文を記すことにする。また、必要に応じて、批語のない箇所の漢語訳本文も取り上げてゆく。

「(一)善者は福を受け惡者は禍を受くとは一切の國民が道德的事物を考察して得たる第一の大根本眞理なり。這般の確信は彼等の生活の經驗の結果として許多の俚諺中に表彰せらる。希臘文學中よりシユミツト氏は其の著「希臘人の倫理學」第一に希臘の這般の俚諺及び章句を蒐集して洩らす所なし。氏其著の劈頭第一に曰く人間の運命は極めて公正にして善人は賞せられ惡人は罰せられるとは希臘人の信仰中最確實なるものに屬すと。」[6)]
「论道德之影响于幸福者。善者得福，恶者受祸，是一切国民据为第一原理，以为考察道德界一切事物之根本者也。此等确信，由彼等生活经验之结论，而常表之于俚谚之中。斯弥得 L.schmidt 所著希腊伦理学第一，凡希腊人之俚谚及文词，关于此义者，网罗无遗。且为之序曰，人类之运命，至公至正，善人受赏，恶人受罚，此希腊人最确实之信仰也。」[7)]
「吾国人亦曰：“作善降之百祥，作不善降之百殃”」[8)]

この節では、「斯弥得谓荷美耳 Homer 之诗，已以此义为主旨。嗣是以后，是等思想，遂为希腊著诗述史者之根本问题。」[9)]という一文がある。これはシュミット[10)]が彼の著作において、ホメーロスの詩の影響を受け、これを趣旨としてきたということである。すなわち、上述したように、善人は福を得て、悪人は災いを受けるという思想であって、ギリシャの著作・詩作・史料において根本的な問題とされてきたことである。毛沢東は、これを読み、“作善降之百祥，作不善降之百殃”と中国の諺を用いて反応した。これは、「良いことをすれば、天の神は必ずこれに多くの幸福をくだし与え、不善をなせば反対に必ずこれに多くの災いをくだす」という意味である。西洋社会がいう神は、中国社会では「天」に位置づけられるといえるだろう。中国では、天は人間の行為を監視し、その道徳的な善悪に応じて懲罰を与える人格神であると考えられている。

「人类之运命，至公至正，善人受赏，恶人受罚」では、人間の運命が平等であるとしているが、これは、神が人間の運命を決めるという思想を背景にしたものである。上述の本文以外で、次のように「凡神虽亦有喜怒哀乐之情，一如人类，而由其全体言之，则确为正义道德之保护者。」[11)] と、神が正義道徳の保護者であり、人間と同じように喜怒哀楽の情を持っていることを示す一文もある。さらに、「神于犯罪者，破契约者，背君父者，不善遇宾客者，皆罚之。于杀人者死之，其应报固有迟迟者，或且有施之于其子孙者。」[12)]と、神は罪を犯す者、契約を破るもの、君父に背くもの、来賓を厚遇しない者を罰し、殺人を犯す者を死に処す。その因果は往々にして遅れてくることがあり、或いはその子孫に因果が来ることがある。このように本文には神の役割について多く叙述されている。

本文では「其后由东方输入轮回转生死后栽判诸说，则且谓其应报有施之于来世者。」[13)]と続き、

東方より輪廻転生・死後裁判というような諸々の思想が輸入された以降、その因果は来生に訪れることがあるとしている。

上述したことは中国における天の思想を想起させるものである。中国の書物において、天に対しての記述は様々なものがあるが、毛沢東の批語は、元々は『書経』商書・伊訓の一節である。これは中国の王朝支配の思想を言い表したものであり、天の神は善を行う有徳なものに対して福祥として国家統治の天命を賦与し、不善の王からは天命を奪うという意味であった[14)]。

中国においては天の思想と政治は直結しているものである。批語より判るように、毛沢東は本文における「神」を中国の「天」の思想を用いて理解しようと試みていたため、西洋的な意味で、「神」を解釈しようとしていたかどうかは疑わしいところである。また、輪廻転生・死後裁判といった思想は、生前に下されることがなかった善悪の判決が、死後、或いは来世に持ち越されるという意味がある。これに関しては、毛沢東は特に言及してはいないが、今までにも触れる機会があった内容であっただろう。

「啻に偶然に神の媒介によるのみならす又事物の性質其物によりて德と幸福とは結合せらる。然れども此塲合に於て幸福の概念内面的性質を帶ぶ。德の實行の直接の結果たる者は外見的幸福にあらで内面的幸福即ち精神の平和なり。外面的幸福は仁人君子常に之を得ると能はずと雖德は外面的幸福をも惹き起すの傾向を有す。よし外面的幸福を得ずとも内面的幸福は必ず之を受くるを得。近世の倫理學の大勢も亦之と相背馳せず。」[15)]

「一切事物之性质，皆有道德与幸福相结合之力。然其幸福之概念，偏注于内界之性质，盖谓德行直接之效果，不必在外界之幸福，而在内界之幸福，即所谓内界之平和也。外界之幸福，不必为仁人君子所必得，而要其德行，固已有吸收外界幸福之力。且即使外界之幸福，终不可得，而内界之幸福，则固可燥卷矣。此等原理。即近世伦理学之大势，亦与之符同。」[16)]

「福德同一。」[17)]

上記におけるパウルゼンの主張は、德と幸福が結合するとき、内面的幸福、即ち精神の平和が訪れるということである。これは、德を行う以外に目的のない行為の事であり、德を行うことのみのために願望されることである。これより、精神が幸福の状態へ導かれるのである。パウルゼンによると、このような特徴は近世の倫理学にも表れている傾向であるという。

毛沢東もまた、パウルゼンと同様に、福と德を同一のものであると考えたようだ。これは中国では、孔子思想に通ずるものがある。孔子もまた、道德の達成に伴う満足感が幸福であり、幸福は道德の中に吸収されているという幸福感を持っていた[18)]。孔子思想がこのようなものであったこともあり、毛にとって幸福を有德な精神の活動のうちに求めたパウルゼンの価値観は受け入れやすいものであっただろう。

「樂天主義と厭世主義とは孰か正しきや。後者正見にして前者謬見なるか。余以爲へらく然らずと。

先づ各國民各個人が折に觸れ時に感して厭世的の嘆息を洩らすは思ふに次の如くに説明して以て之を樂天的見解と調和するを得ん。善人の時としては外面的に不幸に遭遇することあるは勿論否定すべからざる事實なり。節制を重ずるものも疾病に罹ることあり衞生に注意せざるものも幸に健康なるものあり。守道の君子も不幸に陥り姦邪便佞の徒も富貴を得ることあり。正直なるものは君主の憎を受け諂諛なるものは其惠に賴る。然れども這般の出來事が大に人の注意を惹き世の激昂を招くは其一般の規則にあらで例外に過きさることを示すものにあらずや。輕薄なる者若くは淫蕩なるもの其身を亡ぼすことありとも何人も之を怪まずして曰く、果して然りと。然るに若し正義公道を守るものにして種々の不幸に遭遇して以て其身を亡ぼすに至るときは何人か天道是耶非耶の嘆を發せざるものあらんや。」[19)]

「乐天主义与厌世主义孰是，将厌世者是而乐天者非乎？余以为不然。凡各人各国民所持厌世之思想，在乐天主义中，固有说以调和之。夫吾人诚不能谓善人必无遇外界之不幸者，如慎于卫生者，间或寝疾；而习于纵欲者，或反健康；君子固穷，而小人得志；忠荩之臣，恒为君主所憎疾，而便佞者则宠禄及之，此诚人世不免。然此等事状，恒使世人异常注意，而为之不平，岂非明示其不合于普通之规则，而当为变例耶。凡以轻薄纵恣之故，而夭逝其身者，人皆以常事视之，曰是固然。然使以守义持正之故，而遭际困厄，甚而至于死亡，则人无不叹天道之难知者。贤者进，不肖者者退，人皆习以为常。至如素行不轨而忽致巨富，则人将永以为口实，是岂非人世之常态耶。」[20)]

「诚哉，诚哉。」[21)]

上記のように、毛沢東は、善人の不幸が社会を厭世主義に陥らせることについて賛成している。すなわち、正義が社会に反映されずに、悪が勝つとき人々は厭世主義に陥るということである。パウルゼンによると、これは一般的には例外ではあるが、このような事例は世間に影響を与えることになるという。

毛が上記で賛同しているように、中国においても上述した事態が起きれば、人々の関心を引き、社会に不和がもたらされることがあるということであろう。

毛沢東が『倫理学原理』を読むこととなった数年前には、辛亥革命を成し遂げた孫文が、袁世凱とその一派によって基盤が弱められ、孫文が掲げた民国の理念は一度消し去られることとなった。袁世凱が実権を握ると、再び清朝時代のような儒教を基盤とした社会となり、更に袁世凱に反対する暴動が各地で頻発すると、人々による不満は社会に溢れることとなった。

毛沢東も自分が生きている時代を見つめながら、この一文を読み進めたはずだ。

「是の故に一社會に於て罪惡一たひ優勢となるときは正人君子は他人に愛せられずして返りて

輕蔑せられ憎惡せらる。然も惡人は相互に憎惡して決して相和することなきを以て世は一般憎惡の有様となりて社會は遂に土崩瓦解するに至らん。」[22)]

「故无论何时何地。苟有一社会焉，为奸佞者所把持，则其间正人君子，必不为人所敬爱，而转受轻蔑凌暴之待遇。然而奸佞之徒，势不免互相冲突，举全社会为怨毒之府，而土崩瓦解之势成矣。」[23)]

「如袁政府。」[24)]

社会で罪悪が優勢となるとき、悪の影響が増大し、憎悪が蔓延して社会が瓦解しそうな状態となることがあるが、毛沢東はこれを袁世凱政権下のような社会であると考えた。悪が優勢となる社会は、パウルゼンによると一般的規則を逸脱した重大な例外である[25)]。悪習が蔓延した社会では、徳は愛されず、憎悪ほど許容されるものである[26)]。パウルゼンはこれを説明するために以下のような例を挙げている。例えば、あさましい娼婦は良家の淑女を嫌うものである、娼婦はこの淑女を単に、非難、嘲笑、誹謗中傷と嫌悪を増幅させるためだけの存在であるかのように仕向けようとすることがある。彼らは満足感を得るために、対象を不名誉と堕落によって引きずりおろし、これによって、ようやく対象への誹謗中傷は止むのである。このような恐ろしい衝動は、悪習の中には内在しているものである[27)]。このようにして出世欲に目が眩み人に媚びる者は、まっすぐに前を見つめて人生を生きる、誠実な者を憎むのである[28)]。パウルゼンによると、悪徳、不幸、恥辱、内面の不和は同類のものであり、徳と内面の平和が関連するように、悪徳と内面の不和は関連するものである[29)]。以上のような例は正に、パウルゼンが説明する悪徳を表出した社会のことである。

漢語訳本文を読み、毛沢東はこれを袁世凱政府のようであると考えた。当時、袁世凱は辛亥革命を成し遂げた孫文の勢力を、暴力的手段を用いて鎮圧し、中華民国のシステムを民国以前に逆戻りさせるなど、国内政治は荒れていた。さらに、1915 年には日本による「対華 21 か条要求」に対抗することなく受諾し、人民の反感を買った。このようなことが重なり、各地で袁世凱打倒を掲げる軍事蜂起なども勃発することとなった。毛の批語も、このような混乱状態を引き起こした袁世凱政権を悪政と捉えてのものであろう。

「曰く、眞に有德なる者眞に德を以て其目的とするものには假令外面的幸福之に伴はず其感覺的の部分は之が爲めに困むとも善を爲すは常に精神的に幸福なり。スピノーザの『幸福は德の報酬にあらずして德其物なり』といへるは即ち是なり。」[30)]

「实行道德者，仅以道德为其鹄的，即使外界之幸福，不与之偕，其感觉之部分，若有所苦，而要之实行道德，即精神之幸福也。斯宾那莎曰，幸福者，非道德之应报，而即道德也。是也。」[31)]

「至论。」[32)]

上の文章では、徳を実行することが精神的平和を保つ手段であることを述べているが、毛沢東もこれを肯定している。パウルゼンは、これをキリスト教徒の特徴を用いながら説明した。キリスト教徒にとって、苦悩することや迫害されることは、確かに災難である。しかし、彼らは、これをむしろ円満のための教育と考える。なぜなら、彼らは神によって精神的平和や幸福が妨害されることはないと考えるからである[33)]。このような思想は、いくらか孔子思想とも類似しているところがあり、毛沢東も理解に難くなかっただろう。毛沢東がパウルゼンを好意的に捉えているということは、彼が多かれ少なかれキリスト教的な価値観を受容する態勢があったといえるのではないだろうか。

「幸福と成功とは自ら足れりとし且つ驕慢に流るるの傾向を有す。幸福なる者は他人の行爲を判斷するに明なれと自己の行爲を判斷するに暗し。自己の成功を以て己の功績とし他人の沈滯坎珂なるは其無能力なるの罪とす。是に於てか他人の力行を尊ます他人の不幸を憐まずして傲慢不遜に陥り遂に以て神人の憎惡する所となる。只夫れ傲慢不遜なり、是に於てか同胞を輕蔑し弱き者征服せられたる者を逆待し、自ら以て安全となすも俄然覆滅を招くに至るなり。」[34)]
「（二）论幸福之影响于性格者。幸福与成功，常易使人自足，而流于骄慢。享幸福者虽尚明于评人，而常味于自知，自夸其功，而视他人之沉滞坎坷，则以为无能。于是见他人之勤力而不之重，见他人之困厄而不之怜，日肆其骄侈，而遂为神人所共愤。凡战胜而骄者，常轻蔑邻国，凌其弱者，虐其所败者，自以为安全无患，而一旦复亡随之矣。」[35)]
「德国是也。」[36)]

上記の批語より、毛沢東は幸福と成功体験によっては人が傲慢になることもあるという指摘を確認している。パウルゼンの原文を用いて補足すると、ここでいう「幸福」は、ドイツ語原文より「外面的幸福」のことを表しているといえる[37)]。パウルゼンのいう「成功」とは、富・権力・名誉・健康・勝利等のことである[38)]。

パウルゼンは一切の文明国民を観察して得た真理として、幸福は人の性格に影響し、安寧を失わせるものであると考えた[39)]。パウルゼンは、外面的幸福は人を満ち足りた気分にさせるものであるが、それによって人は傲慢となり、暴力的となることがあると指摘している。その結果、神の怒りを買って報復され、最後は破滅させられることがあると説明している[40)]。パウルゼンによると、これらは、ギリシャ人のとりわけ詩人や歴史家によって言い表されてきた見方であり、これがたいていの場合は真理であるという。これは並外れた良識こそが人々を繁栄に導くことを可能にさせるということである[41)]。

毛沢東が上記本文における幸福と成功を具体的に如何様に捉えたかは定かではないが、上記本文を人間の常であると考えたのだろう。

「個人に就きて論ぜし所のものは推して個人の集合躰即ち國民、階級、黨派に及ぼすべし。彼等の幸福を得るは頓て其衰亡する所以なり。彼等は反省の能力を失ひ、氣力を失ひ、節制を失ひ遂に其輕蔑せる反對者の爲めに覆滅せらる。私慾を肆にし驕奢を極むる者程世人の嫌惡せる所となるものなし。

幸福の結果の衰退滅亡なるが如く不幸、不成功、沈滯坎珂は之を教育し之を強大ならしめ純粹ならしむるの結果を生す。不幸は意志を堅固ならしむ。意志のよく不幸に堪ふるときは其彈力を增す。不幸はよく逃避す可らさるとを忍耐せしめ、よく自己の氣力を嘗試するの能力を練磨せしめ、よく謙讓の德を養成す。幸福は人間の互に相抗拒するの性質を發展せしめ、不幸は人間をして相結合せしめ、温和に忍耐に正直ならしむ。夏日遽に急雨に遭ふときは今まで相抗拒せる人々皆其降り止むまでは同じ軒塲に雨を避けて高きも卑きも共に睦じく談笑せん。之と同しく一都市若くは一國民大不幸に遭遇するときは其幸福なる頃には互に相暴慢し相憎怨せる者も皆協心戮力以て之に當るに至る。最終に最高なる道德的圓滿は一般に不幸苦楚に遭遇する後ならでは成熟せず。」[42)]

「由一人而推之于团体若国民，社会，党派，亦然。苟其共享幸福，则衰亡之兆见已。彼将由是而失其自知之明，耗其实力，驰其节制，卒也颠覆于其素所鄙夷之敌人。盖世之可畏可疾者，固未有过于矜伐而骄奢者也。幸福者衰亡之媒，其证据如此矣。而不幸之境遇，若失败，若坎坷，乃适以训练吾人，而使得强大纯粹之效果。盖吾人既逢不幸。则抵抗压制之弹力，流变不渝之气节，皆得籍以研炼。故意志益以强固，而忍耐之力，谦让之德，亦由是养成焉。幸福者，常使人类以温和，含忍，正直之性质，互相接近。夏日旅行，忽逢骤，则虽互相疾视之人，相与同止于亭轩，而谈笑无猜。其在一都会，一国民，遭火不幸，则虽平日相憎相慢者，皆同心协力以御侮，皆其证也。最高尚之道德，非遭际至大之艰苦，殆未有能完成者。」[43)]

「振聋发聩之言。」[44)]

上記の批語より毛沢東は、この内容を評価しているようである。すなわち、人間が不幸・不成功・沈滯などに遭遇したとき、これを悲観的なものとして捉えず、これを温和と忍耐を養成する機会とする姿勢である。不幸を経験することは、意志を強固にし、德を積むことである。これは社会においても同様で、大不幸に遭遇した後は、国民は円満になるということである。

これを漢語訳されていない箇所の、ドイツ語原文を用いて補足すると、このような姿勢は、キリスト教に由来しているといえる。イエス・キリストが後世まで信仰される理由は、彼が、壮絶な苦しみを経験したためである。イエスは生前、民衆に非難され、弟子に捨てられ、磔刑に処せられることとなった。死の直前、彼は十字架に張り付けられ、項垂れながら、「善を成すためには苦痛に苦しむことがあるが、それによって信念を曲げることもなければ、非難や軽蔑によって精神的な平和を失うことはない」と言い残している[45)]。苦難の連続であったイエスの生涯にも表れているように、キリスト教は苦痛の哲学で成り立っているといえる[46)]。

毛沢東が、漢語訳されていない、キリスト教徒の哲学を支持していたかは明らかではないが、上記の本文を啓蒙的であると捉えていることは、当時の時代背景によるものであろう。正に、辛亥革命が途中に終わって、混乱を渦中であった当時の中国社会を背景とすれば、この一文は、今の苦難の次に到来するはずの円満な未来を期待させるものであったはずだ。

「世には現在の世界よりも良き世界あり得とし從ひて現在の世界に滿足せさるものあり。彼等假し其想像の世界を實現し其中に生活するを得は思ふに其前に輕蔑せる世界の寧ろ優れるを發見せん。世に大に其祖國を憎惡し輕蔑して之を去りて暫らく其熱望せる新世界に住居するや忽ち其故國を思慕するの情を惹起し初めて其祖國との關係の淺少ならざるを知るものあり。厭世論者假し暫らく地球を離れて星界に住するを得は思ふに亦地球を思慕感謝するの念慮油然として涌出し其暴論を吐きしを悔悟するに至らん。」[47)]
「世盖有不满于现在世界，而驰想于其他之极乐世界者，无论其想象之无据也，即使果如其所想，别有天地，而容彼居之，恐彼转记忆其素所嫌忌之世界，而以为较胜矣。世尝有厌其故国而迁居海外者，未几而乡思顿生，乃悟一身与故国之关系，至为密切。今之持厌世论者，亦然。苟使彼暂离大地，居于星界，其思慕故土之思，将油然而生，而悔其持论之不衷矣。」[48)]
「吾人平昔即有此情形。」[49)]

世の中が行き詰ると、社会全体がユートピア的な世界を支持することがあるが、毛が直面していた当時の社会も、正に八方塞がりの状態だったのであろう。上記の本文は、現状の世界より脱出して新世界への移住に憧れることがあるということを説明している箇所であるが、これは正にユートピア論であるといえるだろう。新国家が樹立されようとする時、建国の理想として、ユートピア論が掲げられることがある。これは、新たに訪れる理想世界への期待を表明するためである。ユートピア論は、現状の社会に対する批判として表出するもので、当時の中国も不満が鬱積している状態であった。

中国における当時のユートピア論としては、1913（民国二年）年に康有為によって発表された『大同書』を挙げることができる。

康有為は、天文学にも関心があり、著書にもその影響が表れている。『大同書』では、康有為の想像する星界におけるユートピア論が展開されている。康有為は「火星・土星・木星・天王星・海王星といった諸天体にも生物が住む」[50)]とし、「これらの諸天体にある極楽世界や自由な境地に心を遊ばせることがある」[51)]という。上記で紹介したパウルゼンの一文も、康有為を想起させるものがある。

悲惨な政治の現状と、度重なる暴動が吹き荒れていた中国国内に身を置いていた毛沢東にとって、理想社会への実現を語ったユートピア思想に触れることは特別なことではなかっただろう。ただし、パウルゼンは厭世主義者であっても最後はやはり祖国を思い出すことがあるであ

ろうことを指摘している、これは、理想世界への逃避ではなく、祖国における改革を促しているかのような一文である。毛も批語において、パウルゼンへの理解を示しているようだ。すなわち、毛もまた理想世界を夢見ることよりも、現実社会の問題を打破することに関心を寄せていたのであろう。

3　結論

中国では、近代化に伴って、西洋的価値観を排除しようとする動きが表面化することがあった。1911 年には、主権在民、基本的人権、議会制民主主義制の理念を掲げた辛亥革命が孫文によって起こされるが、その成果は袁世凱を頂点とする軍閥と閣僚によって奪われることとなった。孫文は勢力は弱まり、同党の指導者である宋教仁が袁世凱一派によって暗殺されるなど、民国の期待は裏切られることとなった。袁世凱が政権を握ることは、孫文が建国した中華民国を形骸化させ、制度自体を清朝時代に逆戻りさせることとなった。このような相次ぐ政治環境の変化により、期待を裏切られた人々は第三革命によって、反袁世凱政権名目の下、武装蜂起するなどして時代は混沌を極めていた。1916 年 6 月には袁世凱が死亡すると、1917 年には、国務総理に就任した段祺瑞が対独宣戦をし、袁世凱の後任として大総統に就任した黎元江がそれに反対するなどの対立を繰り広げ、政府内部は混乱をきたしていた。

本稿でとりあげた『倫理学原理』が毛沢東によって読まれたのは、正にこのような時代背景の下であった。本稿では、第七章のテーマである「道徳及び幸福」について、毛沢東が残した批語がどのようなものであったか分析してきた。

この章における毛沢東の批語は、他の章よりは、短く簡潔に記されているが、これらの批語はパウルゼンを肯定的に捉えているものが多くみられた。

西洋に対して複雑な感情が蔓延していた当時の社会下で、このような著作に触れることができたということは、若き毛沢東にとって幸運な経験であったといえるだろう。そして、楊昌済並びに毛沢東は、『倫理学原理』という書物を読み解く姿勢より、社会問題に対して高い意識を持っていたということをうかがうことができる。

さらに、毛沢東が以下に述べるような意見を持っていたと分析することができた。

毛沢東は、自然の摂理、即ち万国共通の現象として、神は善を成す者に幸福を与え、悪を成す者を不幸とするということを再確認している。毛の批語では、中国伝統思想に照らし合わせて、「神」を「天」として捉え、理解していたようだ。

また、毛は、徳を幸福と同一のものであるとみなした。すなわち、徳を実行することは、精神の平和を実現することであり、これによって、幸福を得ることができるということである。これは、孔子思想にも通ずるところがあり、中国伝統思想を学んできた毛にとっても理解しやすいものであっただろう。

毛沢東は批語において、当時の袁世凱政府について触れている。批語が記されている本文は、

社会に蔓延る悪について述べている箇所である。これより、毛沢東が袁世凱政権を批判的に捉えていることを推測することができる。パウルゼンの言葉を借りれば、袁世凱政権下の社会は中国においても一般的規則を逸脱していたということであろう。

パウルゼンは、神によって制裁が与えられるべき悪人が優勢となり、悪の勢力による憎悪が社会に反映された状態では、善人が憎まれ不幸となることがあり、この状態が続けば、社会は閉塞的となり、人々は厭世主義に陥ることとなるという。

パウルゼンの挙げた例は、毛沢東に当時の社会を善と悪という観念を用いて再確認させる契機となったのであろう。すなわち、近代的民主主義の理念の下に中華民国を建国しようとした孫文を善、その新国家の体制を略奪して形骸化させた袁世凱を悪と捉えているかのようである。

例え不幸を経験したとしても、これを悲観的なものとせず、忍耐を養成する時期であると捉える姿勢を、毛沢東は評価している。不幸を前向きに考え、意志を強固とする機会と捉える姿勢は、キリスト教徒にも通じるものである。毛沢東には、キリスト教的価値観も受容し得る姿勢があったということであろう。

ここでいう不幸とは、個人におけるものだけではなく社会も対象としている。パウルゼンは、社会全体が大不幸に見舞われたとき人々は団結し、その意志や絆はより強固なものとなり、不幸の後は円満が訪れると考えた。

毛沢東はパウルゼンによるユートピア論も読み、人々はこのような世界に憧れるものであることを学んだだろう。中国では康有為に代表されるように、新しい社会への憧れを表出させたものである。現に、後年の毛沢東は、中華人民共和国を建国させる際に、建国の理念を大同思想に託したことがある。ただし、パウルゼンは、仮に星界などの理想世界に移住すれば、厭世主義者であっても祖国を思慕するであろうことを指摘している。

以上のように、中国伝統思想と西洋的価値が対立していた社会を背景としながら、毛沢東は『倫理学原理』を通して西洋的な思想に触れてきた。これを読み進めることによって、毛沢東はこれまでに学んできた中国伝統思想と西洋思想の中の双方の共通点を見つけたことであろう。この章に残された批語は、パウルゼンの考えに対して肯定的なものが多くみられた。すなわち、毛沢東はこの章を読むことによって、自分が培ってきた価値観を再確認することとなったはずだ。

このように、西洋的なものを排斥しようとしていた社会背景とは裏腹に、思想面では、西洋思想と中国伝統思想の中には、類似点も多く見られた。現に、この章では、毛は強烈にパウルゼンに反発することはなく、中国的な価値観を、新しく輸入することとなった西洋思想の中に再確認しているかのようであった。

『倫理学原理』第七章における毛沢東の批注を取り上げた本稿では、混乱をきたしていた時代であったにもかかわらず、西洋思想を学ぼうとした毛沢東の革新性と、当時の社会問題に対する意識の高さを確認することができた。

毛沢東思想は、現在でも中国社会に影響を及ぼしているといえる。しかし、それらは主に彼の後年の思想を指すものであって、青年期の価値観を毛沢東思想として、どのように位置づけるかという問題が生じる。毛沢東が『倫理学原理』と出会ったのは若干 23、4 歳の時であり、このような年齢を考えると、彼の思想は未発達の段階であったと考えられる。しかも楊昌済による学問的指導の下で批語が記されたことを考えると、これを毛沢東思想という枠組みに収めるのは無理があるかもしれない。

しかし、毛沢東が尊敬していた、後の義父となる楊昌済の講義は彼の生涯において大変有意義な経験であったはずだ。それに伴い、毛沢東の心情においても『倫理学原理』より影響を受けたことは間違いない。これより、青年時代に、パウルゼンの著した西洋思想との出会いは、多かれ少なかれ彼の思想基盤を構成する一部分を担ったといえるだろう。

＜注＞

1) 漢語訳の題は『伦理学原理』であるが、本稿では『倫理学原理』で統一する。
2) 中屋敷宏『初期毛沢東研究』蒼蒼社、1998 年、p. 85。
3) Friedrich Paulsen, System Der Ethik Mit EinemUmriss der Staat-Und Gesellschaftslehre, Bd.1, Berlin, 1896. P. 369.
„Die Betrachtungen über das Verhältnis von Tugend und Wohlfahrt“
4) System der Ethik, Bd.1, p. 369.
„1. Welchen Einfluß hat die Tugend auf das Glück?“
5) System der Ethik, Bd.1, p. 369.
„2. Wie wirkt das Glück auf den Charakter?“
6) フリードリッヒ・パウルゼン著、蟹江義丸訳『倫理学』　博文館　1900 年、p. 225。
System der Ethik, Bd.1, pp. 369-370.
„1. Daß es dem Guten gut und dem Schlechten schlecht gehe, ist die erste große Grundwahrheit, auf welche die Reflexion auf moralische Dinge alle Völker geführt hat; in zahllosen Sprüchen wird diese Überzeugung als die Summe ihrer Lebenserfahrungen ausgesprochen. Aus der griechischen Literatur hat L. Schmidt im ersten Kapitel seines Werkes über die Ethik der Griechen eine erschöpfende Zusammenstellung solcher Sprüche und Stellen gemacht. ‚Zu den festesten Voraussetzungen, ‘ so beginnt er sein Werk, von denen der Glaube der alten Griechen nicht lassen mochte, gehörte, daß in den Schicksalen der Menschen eine strenge Gerechtigkeit waltet, welche das Gute belohnt und das Böse bestraft. ‘“
7) 中共中央文献研究室中共湖南省委《毛泽东早期文稿》编辑组编『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』中国湖南人民出版社、2008 年、p. 226。
8) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 226.
「我々の国の人はまた言う。善を作せば之れに百祥を降し、不善を作せば之に百殃を降す。」
9) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 226.
10) シュミット（L.Schmidt）は、19 世紀のドイツの哲学者であり、漢語では「斯弥得」と表記される。著作は《希腊伦理学》であり、第一章には、ギリシャの諺や格言が叙述されている 。
11) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 226.
12) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』pp. 226-227.
13) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 227.
14) 池田秀三他『岩波講座東洋思想第十四巻　中国宗教思想史 2』岩波書店、1900 年、p. 190。
『書経』商書・伊訓の本文では“作善降之百祥，作不善降之百殃”の一文の主語は上帝であるが、これは「天」を表しているといえるだろう。
15) 『倫理学』p. 227.
System der Ethik, Bd.1, p. 371.
„nicht bloß zufällig, durch die Vermittlung der Götter, sondern durch die Natur der Dinge selbst sind Tugend und Glück verbunden. Doch wird hier der Brgriff des Glücks verinnerlicht: nicht äußeres Glück, Eutychie, sondern inneres Glück, Friede und Gemütsruhe (Glückseligkeit) ist unmittelbar mit der Bethätigung der Tugend

verbunden oder tritt als ihre notwendige Wirkung ein. Äußeres Wohlergehen wird dem Weisen und Tugendhaften nicht immer zu teil; doch hat die Tugend die Tendenz, auch dieses hervorzubringen; trifft es nicht ein, so bleibt ihm das innere Glück nicht minder gewiß. Nicht anderes faßt die vorherrschende Richtung der modernen Moralphilosophie das Verhältnis.“

16) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』pp. 227-228.

17) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 227.

「福と徳は同一のものである。」

18) 日原利国編　『中国思想辞典』研文出版、1984 年、p. 125。

19) 『倫理学』p. 229.

System der Ethik, Bd.1, p. 372.

„Auf welcher Seite ist das Recht? Wird die Wahrheit der ersten Betrachtung durch die zweite aufgehoben? – Ich meine doch nicht.

Was zunächst jene vereinzelten pessimistischen Anwandlungen anlangt, die bei jedem Volk und bei jedem Einzelnen gelegentlich vorkommen, so kann man vielleicht auf folgende Weise sie erklären und mit der optimistischen Ansicht versöhnen. Es ist freilich eine nicht wegzuleugnende Thatsache, daß es dem Guten äußerlich nicht immer gut geht. Auch wer mäßig und vernünftig lebt, wird krank, und umgekehrt, einem, der übel genug mit seiner Gesundheit umgeht, dem hält sie aus. Ein tüchtiger und erhlicher Mann bringt es mit aller Anstrengung zu nichts, und ein Schurke kommt auf Schleichwegen zu Reichtum. Aufrichtigkeit zieht den Haß eines Mächtigen zu und Schmeichelei gewinnt Gunst. – Aber gerade der Umstand, daß solche Vorkommenisse so sehr die Aufrichtigkeit auf sich ziehen und die Empörung erregen, scheint anzudeuten, daß sie doch nicht die Regel, sondern die Ausnahme sind. Wenn ein leichtfertiger oder liederlicher Mensch zu Grunde geht, so findet das niemand auffallend, man sagt; das kommt davon, und redet nicht weiter darüber; wird aber ein vernünftiger und tüchtiger Mann durch allerlei unglückliche Zufälle zu Grunde gerichtet, während jener gedeiht, so scheint das gleichsam wider die Natur der Dinge, und man beruhigt sich erst in einem allgemeinen Spruch, der auch jenes als möglich erscheinen läßt: Unkraut vergeht nicht! Die Dummen haben das Glück! “

20) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 228.

21) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 228.

「確かに、確かに。」

22) 『倫理学』p. 231.

System der Ethik, Bd.1, p. 373.

„Wenn also einmal in einer Gesellschaft das Laster das entschiedene Übergewicht erlangt hätte, dann würde die Tugend hier nicht mehr die Eigenschaft haben, vor den Menschen angenehm zu machen, sie würde dann, wenn nicht Verachtung, so doch Abneigung und Haß bei den meisten hervorbringen. Da auch die Laster nicht die Kraft haben , angenehm zu machen, - denn Tugend empfiehlt zwar bei den Tugendhaften, aber Laster nicht bei den Lasterhaften, vor allem nicht die sozialen Untugenden – so würde damit die Auflösung aller Gemeinschaft in allgemeinem Haß gegeben sein.

23) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』pp. 228-229.

24) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 229.

「これは袁世凱政府のようである。」

25) System der Ethik, Bd.1, p. 373.

„Von der letzteren Regel giebt es aber allerdings eine wichtige Ausnahme “

26) System der Ethik, Bd.1, p. 373.

„bei dem Lasterhaften erwirbt Tugend nicht Liebe, sondern Haß.“

27) System der Ethik, Bd.1, p. 373.

„Die ehrlose Dirne haßt das ehrbare Mädchen; das bloße Dasein dieser ist ihr ein Vorwurf, den sie durch Spott, Verleumdung und alles das, was der Haß zu thun antreibt, an ihr rächt. Die größte Genugthuung ist ihr, jene in die eigene Schande und Verdorbenheit herabzuziehen, dann ist der Vorwurf verstummt. Das ist der furchtbare Trieb zur Verführung, der dem Laster innewohnt.“

28) System der Ethik, Bd.1, p. 373.

„So haßt der Schmeichler und Streber den ehrlichen, wahrhaften Mann, der mit geradem Rücken und offenem Gesicht durch das Leben geht“

29) System der Ethik, Bd.1, p. 371.

„Tugend, Wohlfahrt, Ehre und innerer Friede gehören zusammen, und ebenso gehören Laster, Elend, Schande und innerer Unfriede zusammen, auf jeden Fall die beiden äußeren Glieder: Tugend und innerer Friede, Laster und innerer Unfriede

30) 『倫理学』p. 233.

System der Ethik, Bd.1, p. 375.

„für den wirklich Tugendhaften, für den, der die Tugend ganz und gar in seinen Willen aufgenommen hat, ist das

Gute thun, auch wenn es äußeres Glück nicht bringen und dem sinnlichen Menschen hart ankommen sollte, immer das Beseligendste. Von ihm gilt das Spinozistische: beatitudo non praemium virtutis, sed ipsa virtus. “

31) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 229.

32) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 229.

「最もな論である。」

33) System der Ethik, Bd.1, p. 375.

„Hinzuzufügen wäre nun übrigens, daß Leiden und Verfolgung für den Christen eigentlich sein Übel ist; es gehört zu seiner Erziehung zur Vollkommenheit, ja es vermag schließlich seinen inneren Frieden, seine Seligkeit in Gott nicht einmal hier auch nur auf einen Augenblick zu stören.“

34) 『倫理学』p. 235.

System der Ethik, Bd.1, pp. 376-377.

„ Glück und Erfolg haben eine Tendenz, selbstzufrieden und übermütig zu machen. Der Glückliche wird leicht ein harter Richter anderer, ein gelinder Richter seiner selbst. Das eigene Gelingen rechnet er sich als Verdienst an; bei fremdem Unglück oder Mißlingen ist er schnell mit dem harten Wort bereit: es ist seine eigene Schuld, er hat es nicht besser haben wollen. So entsteht, indem die Achtung vor fremdem Streben, die Scheu vor fremdem Unglück verloren geht, jener den Göttern und Menschen verhaßte Gemütshabitus, den die Griechen Hybris nennen. Aus ihm bricht dann die verächtliche Behandlung der Dinge und Menschen, die schnöde Mißhandlung der Schwachen und Besiegten hervor, und dem Sichgehenlassen in sorgloser Sicherheit folgt bald der Sturz,der durch innere Erschlaffung und Sorglosigkeit vorbereitet ist.“

35) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 229.

36) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 229.

「ドイツもこのようなものである。」

37) System der Ethik, Bd.1, p.376

„Unter Glück aber wird hier das äußere Glück (Eutychie) verstanden.“

38) System der Ethik, Bd.1, p. 376.

„Reichtum, Macht, Erfolg, Ansehen, Ehre, Gesundheit, Kraft, Sieg, Gelingen aller Art.“

39) System der Ethik, Bd.1, p. 376.

„Es ist die zweite große Grundwahrheit, auf die alle seiner gebildeten völker durch die Beobachtung menschlicher Dinge geführt worden sind, daß im Glück eine Gefahr für den Charakter und damit zuletzt auch für die Wohlfahrt liegt. Wenn oben als der erste Satz der griechichen Lebensweisheit bezeichnet wurde, daß es dem Guten gut und dem Schlechten schlecht geht, so kann man als den zweiten hinzufügen: daß Eutychie nicht gleichbedeutend mit Eudämonie, daß ungemischtes Glück sein Glück sei.“

40) System der Ethik, Bd.1, p. 376.

„Das Glück erzeugt ein sattes Gemüt, ein fettes Herz, sagt der Psalmist; in solchem gedeiht Übermut, und dieser führt zur Frevelthat, welche die Rache der Götter und damit das Verderben herabzieht.“

41) System der Ethik, Bd.1, p. 376.

„Das ist nach der Anschauung des griechischen Volkes, wie sie in seinen Dichtern und Geschichtserzählern sich ausspricht, der natürliche Lauf der Dinge. Nur ein ungewöhnliches Maß von gesundem Sinn macht fähig das Glück zu tragen. Gewiß eine wohl begründete Anschauung.“

42) 『倫理学』pp. 237‐238.

System der Ethik, Bd.1, p. 378.

„Was von den Einzelnen gilt, das gilt auch von den Kollektiv wesen, von Völkern, Ständen, Parteien: am Glück gehen sie zu Grunde. Sie verlieren die Fähigkeit der Selbstkritik und Selbstzucht, sie verlieren Kraft und Haltung, sie verlieren den Sinn für das Geziemende und das Maß für das Wirkliche und unterliegen darum, innerlich zu Grunde gerichtet, ruhmlos dem verachteten Gegner. Es giebt nichts Widerwärtigeres auf der Welt, als eine Gesellschaft fetter und satter Menschen, die mit ihrer Fettheit und Sattheit prunken, nichts, das alle gesunden Instinkte der Menschheit so gegen sich aufbrächte, und darum nichts, das des Untergangs sicherer wäre; wie es denn die Geschichte bestätigt.“

System der Ethik, Bd.1, pp. 378-379.

„Die Kehrseite der Wirkung des Glückes ist die erziehende, stärkende, reinigende Wirkung des Unglücks, des Mißerfolgs, des Leidens. Das Unglück stählt den Willen, es geht ihm, wenn er es überhaupt erträgt, elastische Kraft, welche mit dem Druck wächst; es giebt Geduld im Ertragen des Unvermeidlichen, mag es den Dingen oder von den Menschen kommen; es übt Fähigkeit, sich selbst und seine Kräfte zu messen und zu prüfen; es macht bescheiden in den eigenen Ansprüchen und gelinde im Urteil über fremde Schwächen. Bringt das Glück die abstoßenden Eigenschaften der menschlichen Natur zur Eintwickelung, so führt das Unglück die Menschen zusammen, es macht sie verträglich, duldsam, gerecht. Wenn an einem Sommertag plötzlich ein Unwetter hereinbricht, dann kann man sehen, wie dieselben Menschen, die sich abstießen und flohen, so lange die Sonne schien, unter denselben Dach Zuflucht suchen, vornehm und gering, sich ertragen und wohl gar einen Scherz mit einander machen. So wenn ein großes Unglück über eine Stadt, ein Volk kommt: es bricht all die Verzäunungen

von Hochmut und Haß nieder, die man in den Tagen des Glücks errichtet hatte. – Endlich, die höchste sittliche Vollkommenheit wird überhaupt nicht gereift ohne Unglück und Leiden.“

43) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』pp. 229-230.

44) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 230.

「啓蒙的な文章である。」

45) System der Ethik, Bd.1, p. 379.

„Durch Leiden ist Christus zur Herrlichkeit eingegangen; verworfen von den Leitern seines Volks, gerichtet von den Ungerechten, gemißhandelt von den Werkzeugen der Gewalt, beschimpft und verflucht von dem Haufen, verleugnet und verlassen von seinen Jüngern, so hat er sich die höchste Krone erworben. Er durfte, an Kreuz das Haupt neigend, sprechen: es ist vollbracht; vollbracht das Höchte, was auf Erden vollbracht werden kann: um des Guten willen Böses leiden, ohne am Guten zu verzagen und den inneren Frieden in Menschenhaß und Verachtung zu verlieren.“

46) System der Ethik, Bd.1, p. 379.

„Das Christentum ist ganz Philosophie des Leidens.“

47) 『倫理学』p. 241.

System der Ethik, Bd.1, p. 382.

„Es giebt Leute, die meinen, daß sie eine bessere Welt anzugeben wüßten als unsere wirkliche, und die darum die wirkliche als eine mißlungene schelten. Wenn ihnen gestattet würde, die Welt ihrer Einbildung wirklich zu machen und darin zu leben, vielleicht würden sie die Entdeckung machen, daß es in der verschmähten Welt doch noch leidlicher ging. Es ist eine oft gemachte Erfahrung, daß Leute, die voll Haß und Verachtung ihr Vaterland verließen, wenn sie nun eine Weile draußen in der neuen Welt ihrer Sehnsucht gelebt hatten, eine große Wandlung der Stimmung gegen die Heimat erfuhren, daß ihnen da erst aufging, wie innig sie selbst mit ihr zusammenhangen. Könnten unsere Pessimisten auf eine Weile auf einen anderen Planeten versetzt werden, vielleicht lernten auch sie mit Sehnsucht und Dank der Erde gedenken. Vielleicht ist die Heilung näherbei als wir denken. Vielleicht kommt wieder einmal für unser Volk eine Zeit, wo es durch Unglück und Leiden lernt, das Leben und seine Gütter richtiger zu schätzen; in der Zeit der Wohlfahrt und des Übermuts pflegt der Pessimismus seine Blüten zu treiben. Für solche kommenden Tage stehe hier ein Vers, in dem einer der Genossen jener Tage des Unglücks und der inneren Erhebung, W. v. Humbodt, seiner Lebensphilosophie Ausdruck gegeben hat:“

48) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』pp. 230-231.

49) 『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 230.

「我々には平素からこのような状況がある。」

50) 坂出祥伸『大同書』明徳出版社、1976 年、p. 90。

51) 『大同書』p. 90.

主指導教員（桑原聡教授）、副指導教員（高橋康浩准教授・吉田治代准教授）